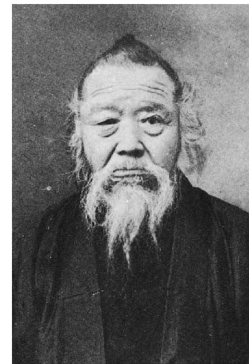


『凛々たる人生』

— 志を貫いた先人の姿 —

「第十九回」環境問題を提起した先駆

田中正造 しょうぞう



田中正造 (1841-1913)

東京大学名誉教授 月尾嘉男

人類が地中から有用な岩石や金属を採取していた最古の遺跡はアフリカ南部のエスワニティで発見されており、四万三〇〇〇年前と推定されている。それ以後、石器の製造に必要な岩石や陶器の製造に必要な陶土などを発掘していた遺跡は世界各地に存在している。

さらに古代ローマ時代になると、金属を採掘する現場に水路を開削して岩石の選別に水力を利用する技術も開発されるが、現場では次に問題も発生するようになってきた。

古代ローマの博物学者ガイウス・プリニウス・セクンドゥスは全三七巻の大著『博物誌』



図1 プリニウス『博物誌』

(図1)に「我々は河川や自然の環境を汚染し、生命を維持する空気そのものさえ生命を破壊する媒体に変化させている」と記述している。二〇〇〇年前から人間は自分たちが自然から必要な物質を採集するために環境を汚染していることに気付いていたのである。当然、その問題を解決しようと努力した人々も多数存在する。その一人を今回は紹介したい。

江戸時代に開発された足尾銅山

日本列島は地球の表面を構成するプレート



図2 日本列島のプレート構造

台となつた栃木県足尾町に開発された足尾銅山である。以前から銅山が存

が四枚も衝突する位置にある(図2)ため、中に様々な鉱物資源が存在する島国であり、すでに七世紀末に日本最古の銅山とされる山陰の荒金鉱山で銅鉱を採掘していたという記録がある。それ以後、全国各地で鉱山が開発されるが、一六世紀になって日本に進出してきたヨーロッパの人々から伝達された技術などを活用する金属材料のため鉱山を開発する活動も活発になってきた。

その一例が今回紹介する有名な事件の舞

在するという情報は流布していたが、江戸時代になった慶長一五（一六一〇）年に二人の地元の農民が露頭（ろとう 鉱床が地表に露出している場所）を発見し、江戸幕府が直轄で鉱山を開発することになった。その結果、足尾には鉱夫などが生活するようになって発展し、



図3 足尾銅山 (1895)

山周辺は「足尾千軒」と名付けられるほど住居が密集して繁栄するようになった（図3）。
最大の時期には年間一〇〇トンもの銅を産出し、付近の日光東

照宮の造営に使用されたのは当然として、徳川家康が江戸に入府して菩提寺とした増上寺の建設にも使用された。さらに寛永一三（一六三六）年から幕末まで使用された通貨の寛永通宝（図4）の素材ともなった。しかし、当時の掘削技術では採掘に限界があり、次第



図4 寛永通宝

に生産される銅鉱は減少し、幕末から明治初期にかけては年間一五〇トン程度に減少した。明治四（一八七二）年に銅山は官営から民営に移管され、やがて古河財閥を創業する古河市兵衛が明治一〇（一八七七）年から経営することになった。当初は新規の鉱脈

図5 日立銅山



日立銅山（茨城）（図5）、別子銅山（愛媛）（図6）とともに日本三大鉱山となった。

国政に進出して活躍開始

このような日本の激動の時期に登場し、足尾銅山に関係したのが今回紹介する田中正

が発見されず前途が懸念されたが、明治一四（一八八一）年に有望な鉱脈が発見されるようになる。明治政府が推進した富国強兵政策の重要な資源であり、足尾銅山は

図6 別子銅山



造である。田中は江戸時代末期の天保一二（一八四一）年に下野国小中村（現在の栃木県佐野市の一部）の名主の家庭に誕生した（図7）。若者の時代から正義を貫

徹する義侠の精神にあふれた人物であり、幕末には村民とともに領主に体制の改正を要求したため、幕末の慶応四（一八六八）年から翌年まで冤罪で投獄されるという経験もしている。
二九歳になった明治三（一八七〇）年に無罪が証明されて釈放され、知人の紹介で江

図7 田中正造生家



刺県花輪支庁（現在の秋田県鹿角市の一部）の官吏となり、凶作であった状況を改善しようとして新田の開墾などに努力するが、翌年に上司を殺害したという容疑で逮捕され投獄

されてしまう。何事にも直言する態度への反感からの冤罪であったが、無実が証明され釈放されたのは三年が経過した明治七（一八七四）年であり、これを契機に一旦故郷に帰還する。故郷では隣村の酒屋の番頭として勤務する

が、そのような立場に安住する人物ではなかった。明治一（一八七八）年に区会議員となった政治の分野に転身、さらに地元で創刊された『栃木新聞』（現在の『下野新聞』）の編集長に就任するが、社会を変革しようとの意気から明治一三（一八八〇）年に栃木県議会議員になる。ところが栃木県令の三島通庸の暗殺未遂事件に関与したとして明治一八（一八八五）年に逮捕されてしまう。

しかし、その年末に三島が第五代警視總監に就任して東京に移動になるとともに釈放され、翌年四月に開催された臨時県会で議長に就任する。さらに明治二三（一八九〇）年に第一回帝国議会が開催（図8）されることになり、それとともに実施された第一回衆議院議員総選挙に田中は栃木三区から出馬して国會議員に当選する。この田中の人生の転機になった時期に、地元でも田中の人生の方向を

図8 第一回帝国議会



決定する事件が発生した。

足尾鉍毒事件 対策に奮闘

田中が国會議員になった明治二三（一八九〇）年に渡良瀬川（図

図9 渡良瀬川



活動を展開したが十分な対策は実行されなかった。

そのような経緯から渡良瀬川流域の農民が鉍毒反対運動を展開するようになる

9）の洪水によって上流にある足尾銅山の鉍毒と名付けられた成分を大量に含有する川水が流域に氾濫し、作物が枯死する被害が広範に発生する一大騒動が発生した。流域の被害を視察した田中は翌年と明治二九（一八九六）年の帝国議会で問題への対策について質問するとともに、世間に幅広く問題を周知させる

り、東京へ陳情に出掛ける事態も発生した。田中も国会で対策を要請する質問を繰返すとともに、地元だけではなく東京でも問題を周知させる演説などをした。その効果により農商務省と足尾銅山の事業者側も鉍山から流出する汚水を脱硫する装置を設置する工事を実

施するが、十分な効果は発揮されず問題は解決しないままであった。

そのような経緯から明治三三（一九〇〇）年に流域の農民が鉱毒反対の陳情をしようと東京を目指した。ところが途上の群馬県川俣村で阻止しようとする警官の一隊と衝突し、多数の農民が逮捕される事態が発生した。そこで田中は国会で「亡国に至るを知らざれば之れ即ち亡国の儀につき質問書」という演説をする。これは憲政史上に記録される有名な演説であったが、総理大臣山縣有朋は「意味不明」として答弁を拒否した。

この川俣事件と名付けられた騒動は裁判となるが、田中が公判途中で欠伸をした態度が不遜であるとして官吏侮辱という罪状で起訴されるといふ陰湿な事件も発生している。本来の裁判は仙台高等裁判所で審理される予定であったが、起訴状に担当検事の署名が記載

されていないという理由で受理されず、明治三五（一九〇二）年に全員釈放という結果になった。このような状況で田中は議員を辞職するが、その直後に有名な事件が発生する。

明治三四（一九〇一）年二月一〇日に帝國議會開院式から皇居に還幸される明治天皇の馬車に田中は突進して足尾鉱毒事件について直訴しようとしたのである。警備の警官に阻止されて直訴はできなかったが、前代未聞の行動は新聞の号外が発行されるほどの事件となり、足尾鉱毒事件は一気に世間に周知されることになった。しかし、政府は事件の背景を隠蔽（いんぺい）するため、田中の不敬な行動を不問として即日釈放とした。

清貧を貫徹した人生

それ以後の足尾鉱毒事件の解決の経緯を説

明しておきたい。前述の不敬事件の翌年の明治三五（一九〇二）年に渡良瀬川下流の埼玉県川辺村と利島村の一带に汚水を貯水する広大な溜池を建設する計画が立案されたが、当然のごとく地元の反対で白紙になった。翌年には栃木県谷中村に溜池を建設する計画が浮上し、栃木県会は土地の買収を決議し、溜池の工事が開始され、谷中村は強制廃村とされて決着という結果になった。

政府は谷中村全域を河川地域に指定して土地収用法を適用し、「旧村に居住していれば犯罪として逮捕する」という強制手段を強行するが、田中は廃村となってからも最後まで谷中村で生活しながら、それまで支援してくれた人々に挨拶をするために地域を巡回し、栃木県吾妻村の支援者宅で大正二（一九一三）年九月四日に客死（きやくし）した。死去した時点での財産は原稿、聖書、鼻紙、日記のみであり、土

地と家屋は教会に寄贈してあった。

田中の人生を翻弄した元凶の足尾銅山は細々と採掘を継続していたが、昭和四八（一九七三）年に閉山となり、輸入した鉱石の精錬作業も昭和六三（一九八八）年に終了した。しかし、精錬のための燃料として木材を伐採した山々の相当部分は閉山以後の緑化作業によって回復しているが、かなりの面積は禿山（はげやま）のままである。明治以来、日本が近代国家として発展してきた歴史の正負の両面を実態として記録する歴史遺産である。

つきお よしお

一九四二年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授、総務省総務審議官などを経て東京大学名誉教授。専門は通信政策、仮想現実。趣味はカヤックとクロスカン トリースキー。著書は『縮小文明の展望』『先住民族の叢智』『転換日本』『凛々たる人生』『爽快なる人生』『意志ある人生』など多数。